

2018 年度湘南藤沢学会「研究助成基金」成果報告書

The 9th Conference of the International Society for Integrated Disaster Risk Management (IDRiM 2018) におけるポスターセッション及び口頭発表

慶應義塾大学 環境情報学部 3 年 花房 昌哉

1.活動日程・会場

日程：2018 年 10 月 2 日 - 4 日

会場：University of New South Wales, Sydney, Australia.

2.活動内容 オーストラリアのシドニーで開催された国際学会「The 9th Conference of the International Society for Integrated Disaster Risk Management (IDRiM 2018)」において、ポスターセッション及び口頭発表を行った。IDRiM 2018 のテーマは、「災害リスク管理に向けたデータ・ドリブン手法」となっており、データ、データ同化・統合、モデリング、分析を中心とした幅広い災害リスクに関する国際学会である。口頭発表及びポスターセッションを通して、自分の研究内容とその意義を多くの方に伝える一方で、世界中の研究者と議論を行うことができた。さらに、他の研究者の発表を見ることで、世界のさまざまな研究の動向をつかみ、多くの知見を得ることができた。



左：ポスターセッションの様子、中央：学会会場の様子、右：口頭発表の様子

3.発表内容

私は、「A Case Study on the “Location Optimizing Plan” for Implementing Ecosystem-based Disaster Risk Reduction (Eco-DRR) measures in Shiga Prefecture, Japan」というタイトルで発表を行った。

急激な人口減少・高齢化への対応として、各自治体が立地適正化計画を策定し、居住誘導区域や都市機能誘導区域を定めることになっている。一方で、防災分野では、近年生態系サービスを活用した Eco-DRR 手法が注目されている。本研究では、現在の立地適正化計画において、防災や Eco-DRR という面での検証をもっと踏み込んで行う余地があるという仮説

から、既存の立地適正化計画の分析と将来シナリオの評価を行う。

まず立地適正化計画、マイクロ人口将来推計、地先の安全度マップを重ねあわせることで、各自治体の災害リスクを健全化させた。研究対象地としては、流域治水条例や地先の安全度マップなどの積極的な治水の取り組みで知られる滋賀県を対象としている。そのデータを元に、滋賀県内で立地適正化計画を策定している全ての自治体にヒアリングを行なった。ヒアリングでは、立地適正化計画を策定する中で、災害リスクに対してどのような認識・対応をしたかという各自治体のスタンスを確認できた。さらに、Eco-DRR が導入できる可能性についても議論を行い、経済的インセンティブや既存の土地利用の評価といった点が重要であるという結論に至った。さらに、Eco-DRR を導入した場合の価値について、被害額の低下やハビタットの質の向上という2点から評価を行う予定である。

4.活動成果

口頭発表では、Eco-DRR による効果をどのような観点から評価するかについて、もう少し議論を整理した方が良いというアドバイスをいただいた。

ポスターセッションでは、主に日本人研究者の方に多く来ていただいた。自治体の方が誘導区域内の災害リスクに対してどのような対応・態度を取っているのかということや災害リスクを避ける際に、コミュニティの観点からも考慮しないといけないことが議論になった。また、立地適正化計画と Eco-DRR を考えるうえで、空き家問題といった人口減少・高齢化に絡む諸問題とも関連して研究をするのも良いというアドバイスもいただいた。また、外国人研究者の方には、立地適正化計画と Eco-DRR という二つのトピックについて、丁寧に説明するとともに、この二つを関連させて研究を行う意義や今後の方向性について議論を行なった。多くの方に私の研究テーマについて興味をもっていただくとともに、激励をいただいた。

5.今後の発展

今回は、私にとって初の国際学会での発表であり、英語でのプレゼンテーションや世界中の研究者との議論など多くの経験を積むことができた。この学会で得たフィードバックや激励を励みに、さらに研究を深化させたい。そして、論文としてまとめ上げ、投稿・発表したいと考えている。

6.謝辞 本学会参加にあたり、ご指導をいただいた一ノ瀬友博先生をはじめ、共著者である秋山先生、瀧先生、吉田先生、資金面でご支援を頂いた慶應義塾大学湘南藤沢学会様に厚く御礼申し上げます。